新川会通信　第50号

すまいる

発　行
社会福祉法人新川会
〒930-0362
上市町稗田字七郎谷１-32
Tel(076)472-1118
Fax(076)472-5391
E-mail yotsubaen@niikawakai.jp
HP http://www.niikawakai.jp/
発行責任者　山岸親史

H18 交通安全キャンペーン

H13 七夕の会

H14 除草ボランティア

＜テーマ＞新川会三十周年～地域とともに～

地域交流
～三十年の活動を振り返って～

理事長　牧野　武

一九八〇年代、ノーマライゼーションの理念の高まりから、我が国の障害者福祉は「共生社会」に向け歩き始めました。そして、一九九五年、その理念の実現に向け、国は「障害者プラン（ノーマライゼーション七か年戦略）」を策定、七本柱の一つに、『心のバリアを取り除くために』として、〝ボランティア活動を通じた障害者との交流、様々な機会を通じた啓発・広報の展開等による障害及び、障害者についての国民の理解〟を促しました。

さて、四ツ葉園は、県内八か所目の精神薄弱者（知的障害者）更生施設として、一九九二年に開設しました。それまで入所施設といえば、地域から離れた中山間地に建設されてきました。こうした事情から、園では日常生活の閉鎖性を打破し、障がい者や施設への理解を拡げるため、ボランティアの受け入れや地域交流に努めてきました。

当初は環境美化活動や生活行事への訪問活動（民話等）が主なメニューでした。「七夕」行事に短冊飾りの代筆をされた婦人ボランティアさんから「園生さんの家族への思いや、感性に触れ、感動し涙が出ました。」との感想を聞いて、改めて交流の意味を考えるきっかけになりました。以降、日舞等、日ごろの練習の成果を近隣の老人施設や町のイベント等に出かけ。参加・交流の場を拡げていきました。また、町社協が企画した、「一人暮らし高齢者宅の除草ボランティア」に登録しました。除草を終えて帰りの挨拶（「ありがとう」、「さようなら、元気で、またね」）のにぎやかでシンプルな交流は今も心に残っています。障がい者は〝できる事と機会が閉ざされている、彼らのひたむきさや実直さを理解してほしい〟と強く感じました。その後、清掃活動や交通安全キャンペーン等の地域奉仕活動に引き継がれました。

その後、地域では、地域福祉活動計画が策定され、地域の福祉活動に参画する機会が格段に多くなりました。その一つが、上市町社協の『ふれあいウォーキング』です。これは、社協が主催してきた「小中

（P２に続く）

高生ボランティア教室の新企画として、町内の立山寺から総合運動公園までの約二キロのコースを、障がい者と児童・生徒さんが班ごとに「一緒に歩く」案を提出し、実施されることになりました。参加児童、生徒さんの感想文には、参加前には「怖く感じた」、「どう接していいか迷った」等、不安や戸惑いが、体験後には、「ふつうだった」「励まされた」、「頑張っている」、さらに、「機会があったら一緒に歩く」等、前向きな気持ちへの変化が読み取れました。『障がい』について、まずは、「ふれあい」、「共感」しあうことが本当の理解につながることを実践から学ぶことができました。「ふれあいウォーキング」は、町内の団体、大勢の町民の参加をを得て続けられ、「共生社会」に向けての実践例として評価されています。

（残念なことに、コロナ禍のため、中止を余儀なくされています。早期の終息が待たれます。）

地域交流から地域連携へ

今日、少子高齢化、核家族化が加速し、社会的孤立等、地域の福祉ニーズも多様化しています。

地域では、ケアネット活動などで住民の暮らしを支えてきた人たちの高齢化により、担い手不足が問題になっています。同じく、福祉施設でも、福祉職離れが常態化し、ともに、福祉の担い手、人材の育成が喫緊の課題とされています。そのため、「地域福祉活動計画」等で、ボランティア活動に関心を持つ人や、地域の生活向上に寄与したいという思いを持つ人たちを対象に、福祉教育サポーターやボランティアコーディネーター等、共に福祉を学び合い、福祉を応援してくれる人たちのネットワークづくりが進められています。

これまで、福祉施設は地域住民のボランタリーな活動に支えられてきました。今後、福祉施設に対しては、身近に「福祉を学び、福祉を体験する場」としての役割が期待されていくのではないかと思います。そのためにも、地域の福祉課題に関心を向け、活力と持続性がある地域づくりのために連携を拡げていきたいと思います。

特集　四ツ葉園

三十周年を迎えた新川会

新川会創立三十周年記念式典

総務課　高木　伸治

十一月十四日（日）、上市町保健福祉総合センターにおいて当法人創立三十周年記念式典が挙行されました。

当日は、理事長の式辞に引き続き、当法人に多大な貢献をいただいた三名の方に感謝状を贈呈いたしました。また、来賓を代表して、新田富山県知事、中川上市町長、山崎県議会議員からご祝辞を賜りました。

式典中には、映像により当法人の事業所の紹介を行いました。各施設長はやや緊張の面持ちで報告していましたが、利用者の皆さんはリラックスしてそれぞれの様子を紹介できたように思えます。式典後は、富山県発達障害者支援センター「ほっぷ」の北川忠様に「誰もが住みやすい地域社会とは」をテーマに記念講演が実施されました。一見「困った人たち」に「少しばかりのおせっかい」と「お互い様の心」で寄り添うことで、素敵な地域社会に繋がることが理解できました。

コロナ禍が続いている中で、記念式典が開催できるか不安もありましたが、たくさんの方々にご協力いただき無事式典を終えることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

職員の声

三十周年を迎えた新川会。現在の想いを代表して四人の職員にインタビューしました。

新川会に寄せて

事務長　川上　邦夫
（平成二十五年入社）

経験したことのない障害福祉分野にご縁を戴き社会福祉法人新川会に入社して、早満九年が経とうとしている。振り返ると驚きや戸惑いもあったが、その反面、感動ややりがいがたくさんあり、出会いに感謝したい。

四ツ葉園は、緑あふれる木立に囲まれ、野兎、栗鼠、狐などの小動物やカモシカ、猪等が迷い込んでくる。まるで動物園にいるかのような自然豊かな環境の中に立地している。そんな所で、泰然自若に過ごしている。

さて、昨年新川会の創立三十周年記念式典が挙行され、一度立ち止まって過去を振り返り、将来を見据える良い機会を得た。書面をお借りして、諸先輩方にお礼を申し上げます。

私事ですが、もうすぐ古希を迎え、体力等低下を感じています。利用者の皆様方や職員においては、明るい笑顔があふれるところを受け継ぎ、更に発展する事を期待します。

調理員　村上　仁子（平成四年入社）

私が、四ツ葉園に勤めるようになり、早や三十年になります。利用生さんも最初は、五十人でしたが、今では八十人になり、ミキサー食、刻み食等食事の取り方も、人によっていろいろ違い、忙しい毎日です。少しでも楽しい食事になるよう頑張っています。三十年の間には、利用生さん達と日帰り旅行、運動会、納涼祭、四ツ葉園祭等、あの頃は私も若かったなあと、楽しかったこと、うれしかったことを懐かしく思い出しています。

そして、０１５７、最近では、コロナ等により調理方法も随分変化しました。毎日、注意しながら調理しています。

これからも厨房の人たちと協力しながら頑張っていきたいと思っています。

主任支援員　酒井　友章（平成十七年入社）

新川会三十周年おめでとうございます。僕が入社したのは十六年前です。結婚し、二児の可愛い子供の父親になり、新川会と一緒に成長した思いです。たくさんの出会いもあり、別れもあり、いつの間にかたくさんの後輩ができました。利用者さんのために立ち向かう、たくましい後輩達の姿に奮起させられる毎日です。

これからまだまだ新川会と共に成長し、障がいを持つ多くの方々と接し、力になれる存在になるように努めていきます。

支援員　柿沢　珠来（平成三十一年入社）

私は短大生の頃、施設実習で四ツ葉園の実習をしたことがきっかけで新川会に入職しました。実習初日に大雪が降り、四ツ葉園までの坂道が登れず困っていた時、職員に助けてもらったことを覚えています。職員の皆さん、そして利用者の皆さんの温かさに何度も助けられ「ここで働きたい」と思いました。働き始めた今でも、その温かさは変わっていません。入職してから来年度で四年目になります。利用者の皆さんが「楽しく」そして「笑顔があふれる」よう、支援していきたいと思っています。

四ツ葉園だより

障害者啓発運動

令和三年十一月三十日に上市町のつるぎふれあい館にて障害者啓発運動に参加してきました。

久しぶりの地域との交流であり、皆さん緊張していましたが、地域の人から「四ツ葉園さんけ？また行事あれば行くね」と声をかけてくださる方もいて、参加された利用者さんは笑顔が溢れていました。

その後、元気一杯に挨拶をしながら啓発運動に参加してくることができました。地域との関わりに心温まる一時を過ごすことができました。

（京塚主任　記）

ふれあいフェスティバル　上市高校生との交流

毎年開催されていたふれあいフェスティバルはコロナ対策として、各団体が協力して町に展示する作品を作ることになりました。第一回の打ち合わせは利用者の方と一緒に令和三年十二月二十四日にズーム会議で行われました。会議参加者の中には、上市高校の生徒さんもいて、生徒さんと利用者の方が意見を交わす場面も見られました。

利用者さんにとって初めてのズーム会議でしたが、画面超しに手を振りあったりと和気あいあいでした。今後も会議や製作を重ね、四月の完成に向けて協力していきます。

（西田主任　記）

贈呈品

令和三年十月二十七日に上市ロータリークラブ様よりケヤキの木の寄贈があり四ツ葉園の中庭にケヤキが植樹されました。

令和四年二月二日に株式会社おみでんき様より車椅子二台を寄贈していただきました。

いただいた寄贈品を大切にしていきます。ありがとうございました。

雷鳥苑だより

コロナ禍で思うこと

「中止」「縮小」「中止」・今年はこの言葉を何度も聞いた気がします。元号が令和に変わり「さあ、これからだ！」と言うときに新型コロナウイルスが流行し、これまでの行事で利用者の皆さんの楽しんでいる姿が思い浮かんできました。特に雷鳥苑は地域の皆さんと関わる行事が多く様々な関係者から「今年はどうかね？」「楽しみにしていたのに残念だね。」と言う言葉を聞くたびに地域に支えられている事業所だと実感しました。ここ二年間、「夏祭り」「雷鳥苑祭」の規模の縮小で保護者や近所の方、関係者が集まり楽しい雰囲気を味わってもらうことができなかったのは残念で仕方がありません。その中でも利用者の自治会が主体となり、いろんな企画やアイデアを出し合い楽しいことを実行してきました。コロナ禍だったからこそ利用者の方々の絆や強いパワーを実感しました。

来年こそは地域の皆さんと一緒に楽しもうという思いもありますが、こればかりは思うようにいきません。こんな時代だからこそ自分たちでできること、考えること、そして実行することを大切にして楽しい雷鳥苑をみんなで作っていく必要があると感じました。

コロナ前の雷鳥苑の姿☆

（松岩主任　記）

さつき苑だより

地域交流

地域交流として上市町社会協議会主催のボランティアスクールに参加しています。ボランティアスクールは、小学生、中学生、高校生が日頃ふれあうことが少ない障害者や高齢者の方々とふれあい、ボランティア体験をすることで他人に共感して思いやりの心を育むことを目的に開催されています。過去には、眼目山立山寺から丸山総合運動公園まで児童・学生たちと一緒にウォーキングを行い、一緒に歩いていく中で、児童、学生、他施設の利用者と一緒に行動するうちに仲良くなる利用者の方もおられました。ウォーキング後は、バーベキュー、スイカ割りを行いました。スイカ割りではお互いに大声で応援を行い盛り上がり皆さん笑顔になっていました。

最近では、フォークダンスや合唱などを行い交流行っています。さつき苑の利用者の方も児童、学生と一緒に活動するのを楽しみに毎回参加されている利用者の方もおられます。

新型コロナウィルスの影響により二年間、開催されていないので利用者の皆さんも残念そうにしていました。コロナ禍が治まり開催された時は、地域の児童、学生、他施設の方々と一緒に楽しみ交流を行いたいと思います。

期末の集い

十二月二十二日（火）に期末の集いを開催しました。おいしい弁当を食べ、ゲームとしてサンタクロースの顔を題材にした福笑いを行いました。ゲーム中は、福笑いを行っている利用者に対して他利用者が大きな声で顔のパーツの位置を知らせていました。最後にサンタクロースからプレゼントを貰うと利用者のみなさんは笑顔になっていました。

（藤井主任　記）

つつじ苑だより

防犯街頭キャンペーン

つつじ苑では、開苑当初より毎年、滑川市の防犯協会や交通安全協会、滑川警察署等からの依頼を受け、防犯啓発活動や交通安全運動に参加しています。

今年度も、十二月十五日（水）に、ショッピングセンター「エール」にて、防犯街頭キャンペーンに参加しました。買い物に訪れた皆さんに「出かける時は鍵を閉めて」「振り込め詐欺に気を付けて」等声をかけ、つつじ苑で作ったマグネットを配りました。皆さんから「気を付けるね。ありがとう。」と声をかけられ利用者さんも嬉しそうにしておられました。

コーヒーの日

新型コロナウイルス感染症の影響により今年度も色々な行事やイベントへの参加が規制されているなか、利用者の皆さんに少しでも楽しんでもらえるようにと八月より毎月一回、移動販売のコーヒー屋「かんのくるま」さんに来ていただいています。本格的な淹れたてのコーヒーを味わいながら、皆さん、至福のひとときを過ごしておられます。また、笑顔がとてもさわやかな店主二俣敢さんとの会話も楽しみなようです。

（宮川支援員　記）

工房よつばだより

販売を通して実感すること

工房よつばでは即売会に利用者さんとともに参加する機会があります。野菜作りにも力を入れるようになり販売できる品も増えました。即売会で直接お客様に声を掛けていただく機会があると、今後の商品作りにもより一層力が入ります。また、特別な即売会だけではなく、年間通して地域の直売所への納品も行うことで、自分たちの野菜がお店に並ぶ喜びや、品が売り切れて空になっていると「売れたね」と皆さんから自然と笑みがこぼれます。販売を通して地域とのつながりを実感できる場となっています。

社会生活体験

十一月一日に県内のステージの引き下げもあり感染症対策の中、みんなでの外出を実施しました。久々の外出で行き先を決める際に一番多かったのは「買い物」で、「自分の目で見て選びたい。」という声が多かったため行先はショッピングセンターと動物園での癒しの時間とすることにしました。まだまだ続きそうなコロナ禍の中、地域で生活しながらの制限と緩和を実践しながら事業所として出来ることを行っていきたいと思います。とてもリラックスした時間を持てて、皆さんの笑顔が何十倍にも見えた一日でした。

（嶋作施設長　記）

グループホームだより

赤い羽根共同募金

十二月五日（日）赤い羽根共同募金の街頭募金運動に参加させていただきました。用意していただいた赤いジャンパーに身を包み、しっかり声を出し募金のお願いをしていました。

社会福祉協議会の方との交流

十二月十六日（木）まえざわの家にて、五百石地区社会福祉協議会の方三名と、立山町社会福祉協議会の方二名が訪問され交流会を行いました。とはいえコロナ禍ということもあり、自己紹介の後、プレゼントを頂くのみという短時間での交流会でした。ですがこれがお互いを知る第一歩となったと思います。

コロナ禍という状況においては「交流」ということにリスクがあり、人との繋がりが希薄になっているように思います。それでもこの二つのイベントは先方から「ぜひご一緒に」と声をかけて頂きました。このような交流を通して地域社会の一員としての自覚も育っていくと思います。この感染症が終息し遠慮なく交流できる日が来ることを願っています。

（黒田施設長　記）

研修

『社会福祉法人セーナー苑』権利擁護・虐待防止研修に参加して

つつじ苑施設長　中川　伸治

令和三年十一月十三日、サンシップとやまにおいて～日々の支援を振り返り、支援の合理的配慮を考える～というテーマで日本福祉大学福祉経営学部教授 綿祐二氏の講演を聴講してきました。

お話の中で「施設に勤務していて日々の支援の中でおかしいと思うことはたくさんある。そのおかしなことをそのままにしておくことやわかったふりをしないことが大切である」と話されました。この『気づき』を放置するのではなく『わからないは、わからない』と言いあって現場（チーム）で話し合う、議論し合うことが虐待防止の鍵を握っているといっても過言ではないことまた『話し合う場』という浄化機能がない施設、事業所は、虐待が常態化していく可能性が高いと講演の冒頭部分で話されました。

グレーな支援については、社会常識で考えることや生活ストーリーと照らし合わせて考えることが必要と話されました。例えば、利用者が登苑した際に機嫌が悪く他の利用者に他害が頻回にありどうしようもなく支援員が『不穏だから身体を抑えた』という状況説明だと不適切支援にあたり再度、家族からの話を伺い総合的に考えることで『（利用者さんが）睡眠ずれをおこして眠れなかったことから他害に至った』そのため体を抑えた。という説明ならば睡眠ずれを改善すれば他害が軽減し有期限であり身体拘束の一時性であることが担保できると言うことでした。

繰り返しになりますが、『わからないは、わからない』と言いあって現場（チーム）で話し合う、議論し合うことが虐待防止の鍵と言うことを再認識できました。

12/11には全体職員会議で今回受講した研修の報告をしました。